

災害写真のデジタル化作業の憂鬱

北原 糸子
KITAHARA Itoko
(事業推進担当者)

1. 災害写真に私たちはなにを見ようとするか

現在、COE プログラムの仕事の一環として、関東大震災の写真のデータベースを作る作業をしている。この災害についてはいろいろなデータベースが可能だが、ホームページにアップするものとして、被害地図の上に関連の写真をドットして、その写真をクリックすると、その地点の丁町目や震度分布、被災の特徴などの情報がわかるものにするということを考えている。

なにしろ、関東大震災の写真帳やビデオ、ガラス乾板の他、絵葉書など残されている量が膨大であるから、それらを網羅するという大それたことはできようはずもないが、数多くの資料の第一歩の整理方法としてはまとまって残されている写真類を所蔵別あるいは写真帳別にファイリングし内容に応じた連関を付けておくことは多少の有効性を持つのではないかと考えた。こうした発想自体が歴史資料として扱おうとする歴史屋の仕事のやり方なのだと自分ではよくわかっているつもりだ。写真を写真としてみるより前に、まず資料として整理してから分析しようという発想なのである。

そもそも関東大震災の写真を手掛けるようになったのは、このCOEの企画で幕末の錦絵までの段階であった自分の災害史研究を写真の登場までフォローした結果、関東大震災までが戦前日本のひとつの区切りになると予測したことによる。これまでの報告書やシンポジウムでも、関東大震災以前の災害写真、大坂洪水（1885年）、磐梯山噴火（1888年）、濃尾地震（1891年）などを分析の対象として取り上げてきた（北原、2006）。しかしながら、20世紀の最大の災害のひとつであった関東大震災の写真は明らかに19世紀の災害とは異なり、残された量、それらを保管する機関、個人を含め、どのような点からみてもそれまでを圧倒する。もちろん、これは災害の犠牲者10万人余という数字に代表される被害の大きさが作用していることはいままでもない。そのことはさておき、災害写真が近代の災害を経るごとに量的にも質的にも発展するのはなぜかということになると、まだホンの片隅をかじり掛けた程度では有効なコメントはできない。この点については、一般的に指摘され、また予測できる点として、カメラの機能改善、大衆が入手可能な程度に廉価になったこと、写真印刷の技術的進歩などなど、多様な要因が作用しているのだろう。

しかし、単純にそれだけでもなさそうな点もある。結論を先取りしていえば、技術改善などの背景の要因は見逃せないが、人々の情報欲求がこうした大事件に際してはメディアの発展、進化を押し上げる最大の力なのではないかということである。

その点は先に挙げた磐梯山噴火や濃尾地震の事例でも指摘してできたことではあった。関東大震災の場合を例にとれば、震災絵葉書はこの大災害でメディアとしてはひとつ領域を為したと考えてよい

だろう。これはすでに既存メディアではあったが、名所や風景でなく、災害絵葉書という領域はこの時作られたと考えてよさそうである。

しかし、以上のことは日本だけではなく、20世紀のアメリカの震災でもいえそうなのである。ここでは、まずそのことを少し紹介しておこうと思う。

2. サンフランシスコ大地震とステレオ写真

1906年、カリフォルニアのサンフランシスコで大地震があった。2005年は丁度100年目に当たるので、これを記念した催しが2005年から2006年に掛けて行なわれた模様である。わたしに関わることでいえば、カリフォルニア大学バークレー校で開催されたシンポジウムに参加した（参照、2006年度COE年報）。その帰り、サンフランシスコ空港の土産物販売店で、“The Great San Francisco Earthquake”というDVDを売っていたので、買って帰った。なによりも、土産物店でこうした種類のビデオを売っているということが日本ではあり得ないという感じがして、びっくりした。

1世紀ということも機に、この地震に就いて出版物も何点か出されたようだ。そのうちのひとつにDavid Burkhart “Earthquake Days: The 1906 San Francisco Earthquake and Fire”（地震の日々—1906年サンフランシスコ地震とその火災）という写真帳が出版された。

この本の裏表紙には以下のような宣伝文が付いていて、ステレオ写真としてみるための3D用めがねも付いている。正確さを欠くといけないから、原文を引用しておこう。

“Stereo Views of San Francisco’s Great Earthquake and Fire; 1906 San Francisco comes to life in this unique collection of over 100 original stereo photographs (viewer included) of the “City-By The-Bay”. These haunting 3-D images were created before, during and after the earthquake and fire that destroyed 508 city blocks and left 200,000 homeless. Accompanied by period newspapers, maps, and lithographs, they recreate San Francisco’s great calamity and indomitable spirit with stunning realism.

これによると、ステレオ写真は1906年以前にも、この地震報道にも、またその後も度々登場し、珍しいものではなかったようだ。ステレオ写真は日本にも導入された。二枚の写真を見据えて、目を一点に凝らすと立体的に見えるという目の錯覚を利用してものらしい。かつて横浜開港資料館の写真展示があった際にその器具とともに、展示があり、みたことがあるが、なかなか立体画像として認識できなかった覚えがある。ここでは、めがねに、以下のような説明が付けられている。

“Hold viewer close. Center over photo. Relax. Allow twin images to merge into 3D. Move photo to focus.”

著者の本業は醸造所の職員だが、エール大学で歴史学を修め、トランベット奏者でもあり、ステレオ写真の趣味を持つという。本書はこのステレオ写真で地震と復興の過程がわかるように構成され、一件2点のステレオ写真に見開き2頁の構成を基本としている。

本書は舞台仕立てで構想されている。まず、序章で、シェクスピアの悲劇「ロミオとジュリエット」のなかでジュリエットの乳母が地震の思い出を語る場面を引用するという洒落た始まりで書き始められている。これにならって、Prelude（前口上）から1幕～4幕、Final Chorus（終幕）で閉じる。全章すべて当時のステレオ写真を基づいて地震、火災発生、震災後、復興策、人々の避難生活を紹介している。当時、多くの写真が撮影されたことは著名な事実であり、6000枚の写真が残されていると

いう (Philip L. Fradkin, 2005)。

20世紀のはじめの突発的な災害でそうした写真記録が大量に残されていたのかは一重にサンフランシスコが当時アメリカ西海岸で繁栄の一途を辿る大都市へと発展していたということによるのだろう。1847年のカリフォルニアで金鉱の発見が荒野に人々が押し寄せ、やがて富が集中する都市が築かれるきっかけになったことはまずは教科書レベルの常識だろう。その繁栄しつつある都市が地震によって一瞬に崩壊したということの衝撃がこれだけの写真による記録化を人々に促した最大の要因ではないかと推測する。

ステレオ写真は1850年以降ヨーロッパで流行したという。流行に拍車を駆けたのは当時のポルノグラフィだということだが (小林, 2005) 震災写真がステレオカメラで撮影され、ステレオスコープを通じて見られることで、よりリアルに震災現場が捉えられることを狙ったのであろう。

3. 関東大震災とサンフランシスコ大地震

しかし、ここで本書を紹介した意義は、実はまた別のところにある。サンフランシスコ大地震は関東大震災の復興に際してよい意味でも悪い意味でもお手本とされたということである。後藤新平復興院総裁が再建東京の都市計画を練るにあたって招聘したアメリカのピアード博士は、すでに後藤が大正9年(1920)から地震直前の大正12年(1923)4月まで勤めた東京市長時代に計画立案した東京の大改造計画構想に参画していた。ピアードがその報告書の印刷完成を俟って提出しようとしていた矢先に関東大震災が起きた。これらの事実については、ピアードが復興院に提出した計画書に自ら以下のように記していることからわかる。

親愛なる後藤子爵閣下、閣下のおまねきによりまして私は千九百二十二年より三年の冬を東京で過ごし、聊か東京市の政治組織及び行政の諸問題を研究いたしました。千九百二十三年六月十二日私は閣下に私の意見概要書を提出いたしましたがこの報告書はかの震災が東京市を荒廃せしめた当時出版手続中であつたのであります。(高橋重治『帝都復興史』第1巻)

ピアードは、博士の再登場を願う後藤新平からの電報を受け、1923年10月7日夫人とともに来日した。焼け跡を歩くピアード夫妻の写真入りで各紙が来日の事実を報じている(『東京朝日新聞』1923年10月7日)。

ピアードが提出した意見書についての興味深い記事が、アサヒグラフ特別号『大震災全記』に「桑港やサロニカは斯うして復興した—ピアード博士から後藤子に提示した復興の虎の巻」の見出しで掲載されている。桑港とはサンフランシスコのこと、サロニカとはギリシャで大火に遭った都市のことである。

上記の記事によると、提出された報告書では、1906年サンフランシスコ地震救護・復興、1916年大火後のサロニカ市再建築を直近の災害復興事例として、まず、サンフランシスコ地震に関する博士自らの調査に基づく被災実態(地震・火災の事実、応急救護、復興方法、復興事業の手段)を踏まえ、そこで発生した弊害、都市計画上で発生した問題点、進行中のサロニカ市再建計画を配し、関東大震災の復興に留意すべき事実を導き出すものであった。

また、この報道記事に添え、記者田中放浪なる筆名で書かれたサンフランシスコ大地震の体験から

得た復興問題が論じられている。これは公式の見解とは異なる率直な内容でなかなか興味深い。

「桑港の大地震と東京の震災

比較にならぬ東京の惨害

桑港の応急措置はノロかった」

(アサヒグラフ特別号『大震災全記』1923年10月28日発行, 51頁)

のタイトルである。

内容は、サンフランシスコ大地震は1906年4月18日午後5時13分に発生、12秒間の激震後、2分後には下町で火災が発生、3日後の4月20日に収まった。12箇所より発火(ビード報告では30箇所、死者498人<一説には3000人余>)、罹災家屋28,188、家を失う者全人口45万中20万人)した。路上を人々はトランクを引きずって右往左往した。地震そのものよりも火災によって被害が大きくなったが、東京の震災に比べれば全く比較にならない。当時はサンフランシスコの自動車が多くはなく、また、兵隊が延焼を防ぐため、焼けていない家屋の人々を家から追い出し、非常手段でダイナマイトで爆破した。水は13日目になって給水され、電気ガスは3ヶ月目になってようやく通じた。これに比べると、東京の場合は、水道は6日目から山の手の一部で給水され、電車の7日目、市内普通郵便は15日目だから、東京の応急策は目覚ましいものがあるという自画自賛のものであった。

自国の災害の被害の大きさを誇るという不思議な、しかしながら、感情の流れとしてはありうると思われる反応を示している。

4. 災害写真の効用—サンフランシスコ地震—

ビードの調査報告に基づいて、東京市が編纂した復興問題の著作、『世界の大震災と桑港復興』が震災の翌年、大正13年(1924)の5月に帝都復興叢書の一冊として刊行されている。この凡例によれば、“San Francisco Relief Survey”(The Russel Saga Foundation,1913)を主とし、桑港大震災に関する原書3種、桑港罹災日本人救済会報告書、故大森博士「桑港震災視察報告書」、数種の保険関係書、建築関係書、その他東京市史稿などを摘録編纂したとある。また、取材を在留日本人会幹事で救護にあたった川崎己之太郎氏に依頼したとする。ここにいう故大森博士とは周知のごとく、地震学の権威として、東京に大地震が起きることを予測した今村明恒の見解を否定した大森房吉のことである。彼はオーストラリアの汎太平洋学術会議出席中にこの地震発生を知り、体調勝れないまま急遽帰国したものの、病気で11月には亡くなった。この大森房吉は関東大震災より17年以前に起きたサンフランシスコ地震について、発生から1ヶ月後の5月18日には早くも桑港地震調査に赴いた。そして、80日間限なく地震現象についての調査を行った。この研究成果が震災予防調査会報告の欧文紀要第1号(1907)に掲載されている。また邦文では、「明治三十九年四月十八日桑港大地震・震原」が『東洋学芸雑誌』(301号, 1906年)に発表されている。この論文で現在サンアンドレアス断層と呼ばれる断層の両側で石碑などの物体の倒壊状況から震動方向を測定し、横ずれの断層の動きがあったことを突き留めているが、地震の原因は地中の奥深い所で起きたと推定するに留まる。そして、横すべり断層によって切断された棧橋、同じく横すべりに生じた地割れ、スタンフォード大学図書館や水道管の損壊の計4点の写真掲げている。大森は地震の地上に表われた現象を写真に撮ることは、



写真1 「日本橋」を中央に、右肩に「三越」、左横に「白木」と赤ペンで書き込まれている。下方にある文字のうち、「飛五」すなわち第五飛行大隊による撮影であることがわかるが、以下の文字は判読不可（官内庁書陵部所蔵）。

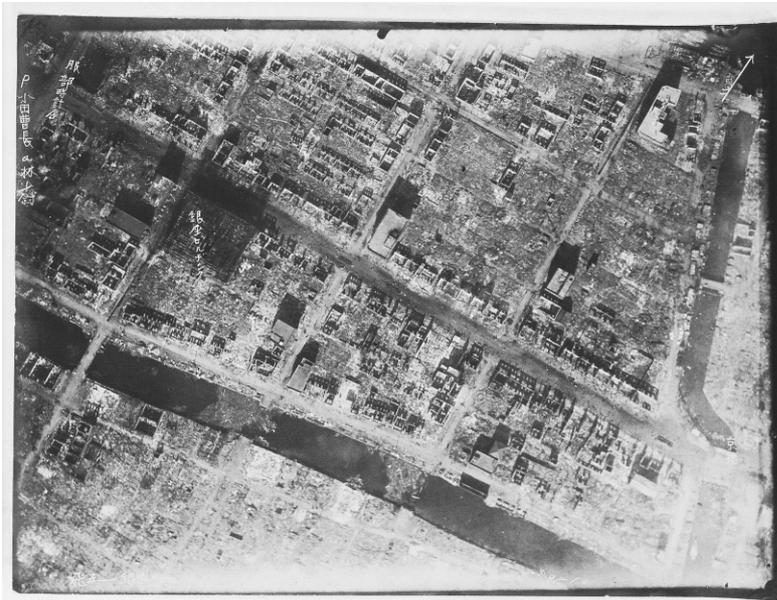


写真2 左肩に「服部時計店」、やや下って「銀座ビルディング」、左下に「京橋」と白字で書き込まれている。写真1と同じく、「飛五」以外の文字は判読不可（官内庁書陵部所蔵）。



写真3 米軍空撮写真、丸の内付近。（東京大空襲、戦災資料センター提供）。

1894年の庄内地震で経験済みであった（北原，2004）。断層が地震を起すとは当時理論的に証明されていなかったということだが，実際の観察によって地震の原因を突き止めようとする大森房吉の姿が髣髴として伝わってくる。『世界の大震災と桑港復興』が主な典拠にしたという“San Francisco Relief Survey”には震災の社会学的分析の最初に位置すると思われる詳細な被害者分析とともに豊富な写真が挿入されている。この地震あたりから，写真が地震の地表に表われた現象，地上の物体の破壊，被害現場，人々の避難状況，復旧，復興のプロセスなど，災害の全体像を記録するのに極めて有効なメディアであることが社会的に広く認知されはじめたのではないだろうか。

5. 災害写真を読み解く—データベースの功罪—

関東大震災の写真は多岐にわたるが，この時期に始めて登場する地震被災地を空から一望する航空写真を整理していると，戦災を大変した世代の人々は，これはみたことのある光景だという。つまり，戦災の東京と震災の東京はすんなりとオーバーラップして違和感はないようである。それほどに一面焼け野原となった東京のありさまは似ているということだろう。関東大震災の空中写真は宮内庁書陵部に所蔵されているもので，当時の近衛師団長下の飛行第五大隊と気球隊が震災翌日の9月2日より偵察飛行のため震災地の上空を撮影したものの一点である。写真1には，中央に「日本橋」，右上に「三越」，左横辺に「白木」の文字が見える。写真2には，右上に京橋，中央に銀座ビルディング，左下に服部時計店などの所在地が書き込まれている。銀座通りはほとんど焼失し，建物の外壁のみが残された惨状が捉えられている。「P小田曹長0林少尉」とあるのは，操縦は小田曹長，偵察は林少尉の意であろう。そもそもの目的は那須御用邸に滞在している大正天皇に地震発生と帝都の状況を報告する目的と震災地上空の偵察を兼ねていた。高度は600メートルと記録されているが，9月5日には偵察飛行とともに，東京市，隅田川以東の地区，相模平に宣伝文の撒布の命令も下されている（「陸軍震災資料」『関東大震災 政府陸海軍関係資料』Ⅱ，第5章，166～182頁，日本経済評論社，1997年）。

この2点の写真によって，火災が東京の中心部に壊滅的打撃を与えていたことはよくわかる。これに東京大空襲の航空写真を併せて載せておく（写真3）。みたような写真だという感想は誰でも持つものであった。

サンフランシスコ大地震のステレオ写真をみていると，同じように，みたことがある光景だと思えてくる。この当時は航空写真はまだ登場していなかったようだから，被害地を歩いて撮影した写真類である。一面に焼け野原となった都市の残骸は，一見すると見分けがつきにくいほど似ているのである。

写真3～7の5点は，空中写真の範囲に点在する当時の著名な建物の震災被害を受けたありさまである。目印となる文字や建物から判断されて，写真の対象物に名称，あるいは解説が付けられているものである。クレジットの関係上，サンフランシスコ地震のステレオ写真をここに掲載できないことは残念だが，地震と火災で都市の中心部が壊滅的打撃を受けたサンフランシスコの震災写真と見まがうものもある。

関東大震災の写真を整理していく上での悩みは写真にキャプションが付けられている絵葉書のよ



写真4 三越百貨店

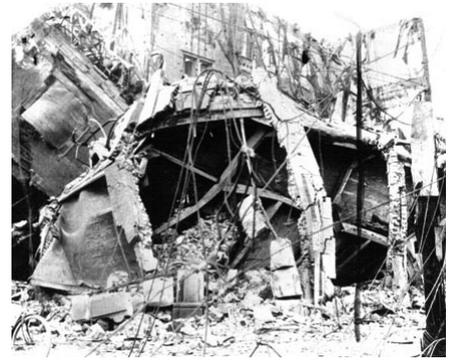


写真5 白木屋



写真6 銀座通り



写真7 京橋区役所



写真8 三越附近のバラック街

写真4～8はすべて東京都慰霊堂保管写真

うな類を別にすると、キャプションのないものの方が多い。これは写されているものを基準に分類作業を進めようとする場合のもっとも大きな困難のひとつである。場所がわかれば、場所による分類も可能だからである。

しかし、また、場所が判明したとして、なんらかの分類を施した場合の問題も発生する。たとえば、濃尾地震の際に取られた多くの写真から、建築史の専門家は次のような指摘をしている。濃尾地震で倒壊したレンガ造りの名古屋電報電信局の写真は西洋から輸入されたレンガ造りは地震国日本には有用ではないということを明らかにするものとして、さまざまところで引用される著名な写真である。しかし、建築史の専門家は倒壊した建物の横に損壊してはいるものの、蔵造の酒蔵が倒壊していないことに目をつけた（西沢，2007）。わたしたちはタイトルやキャプションの付けられた写真ではその説明に注意を引かれて、他のものへの関心を閉ざしてしまう傾向がある。

データベースの基礎作業としての整理，入力などを終えたとしても，新しい発見ができるように資料を整えておくにはどういう配慮が必要なのか，議論が熟していない，このことが写真整理の途上でのもっとも憂鬱なことなのである。

参考文献

- アサヒグラフ特別号『大震災全記』1923年10月28日発行
 北原糸子「災害と写真メディアー1894年庄内地震のケーススタディー」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議調査研究資料、『環境と景観の資料化と体系化にむけて』2004年
 北原糸子「メディアとしての災害写真」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『版画と写真』，2006年
 北原糸子「関東大震災の写真（東京都慰霊堂保管）について」『歴史災害と都市ー京都・東京を中心に』立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム・ジョイントワークショップ報告書，2007年
 小林美香『写真をく読む>視点』青弓社，2005年
 高橋重治『帝都復興史』第1巻，94～95頁，復興調査協会，1930年
 帝都復興叢書『世界の大震災と桑港復興』田島勝太郎述，東京市社会局社会教育課調査，至誠堂書店，1924年
 西沢泰彦「事実と印象が混在した被害記録と冷静だった建築界の対応」『サイスマ』（財）地震予知総合研究振興会，地震調査研究センター，2007年1月号
 David Burkhart “Earthquake Days : The 1906 San Francisco Earthquake and Fire”, Faultline Books, Cal, 2005
 F.Omori ‘Preliminary Note on the Cause of the San Francisco Earthquake of April 18, 1906’ “Bulletin of the Imperial Earthquake Investigation Committee”, 1907, Vol.1, Tokyo
 Philip L. Frandkin “The Great Earthquake and Firestorms of 1906”, University of California Press, 2005

